
銃弾の先にあるものは

山田詩織子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃弾の先にあるものは

【Nコード】

N1922Z

【作者名】

山田詩織子

【あらすじ】

世界歴3011年。

五回目の大戦が終わって20年が経ったものの、なお世界には傷跡が残っている頃。

とある高等学校生の少女、秋原菖蒲には秘密があった。

それは殺し屋として裏の世界で活動していることだった

激化する争いの中、少女たちは大切なモノを守りきることができ

の
か。

プロローグ

世界歴3011年。

第五世界大戦が終わって20年の月日が経った。

しかし。

東国、西国、南国、北国。

どの国も深い傷を負ってしまった。

国が、町が、人が、まだ回復しきれていない。

工場は焼けた。

技術は消えた。

従業員は死んだ。

とある政治家は言う

『戦争前と同じ水準に戻るには早くて百年かかるでしょう』

『その間に、何も起こらなければいいのですが』

今のところはこれといって何も起こってはいない。

テロも、暴動も。

平和ではないが、脅威ではない生活。

だが光には影があるように、表には裏がある。

裏社会ではいつもピリピリとした空気が漂っていた。

裏では人身売買や内臓の取引が

さらに裏では目も当てられぬほどの拷問をされる人がいる。

表の人間は知らない。
表の人間は裏を裁けない。

裏の人間を裁けるのは、裏に生きる人間だけ。

ここからが本題だ。

『殺し屋』

いつから存在していたのか定かではないが、いつの間にか存在していた。

裏に生きる人間。

彼らには法律は一切関係ない。

殺す理由は人様々。

私欲、邪魔者を消す、はては依頼で。

殺し屋が殺し屋を殺すことも当然あった。

それがこの十年で激化してきた。殺し屋を営む一族が二つ三つ全滅した。

まさに血で血を洗う戦い。

「ひでーな」

血と硝煙漂う部屋のなかで男は呟いた。

「こりゃ、大規模な争いは近そうだ」

殺し屋一族、青野^{せじ}舌。

とある少女を殺し屋として仕立てあげた男。

話は、その少女を中心に回っていく。

日常

喫茶あーるぐれい。

町の隅にひっそりと建つ紅茶専門の軽食喫茶だ。

昼時のピークも落ち着き、今は女マスターと常連客がカウンター越しに会話をしていた。

「しょーぶさーん、聞いてくれよお」

つつぶつしながら五十代後半の常連客は恨み言でも吐くように言う。秋原しょうぶは「またか」と呆れたようにカップを洗い続ける。

「どうせまた奥さんとケンカしたんでしょ？残念ながらここは相談室じゃなくて喫茶店です」

素っ気なく言い切つて洗つたカップを今度は拭き始める。

「冷たいよしょうぶさあん！」

凶星だったようだ。

「はいはい、すいませんねー冷たい女で」

ふと、手の中のカップを目元に持っていきまじまじと見る。

「…ひび入ってきた。しかも大きめ」

険しげな表情で他にもひびがないか探す。

常連客も真剣そうな顔で口を開く。

「紅茶カップか…入手は難しいよ」

「ええ。戦時中は無駄なものは徹底的に作らなかつたですからね」

「全くだ。あの戦争で勝つたとしても、何が手にはいったことやら東国政府は無駄な技術に人を回すぐらいなら、必要な技術　つま　り武器に回すように統制した。」

また、戦時中に工場が空襲かれたり技術者が戦場で散つていったために流通は未だ非常に少ない。

技術は衰退し、消えかけているときている。

このティーカップやポットもなんとかしてかき集めたものだった。

「補修してみます。捨てるのは勿体無いですしね」
それだけ他と避けて置く。

カランとドアに取り付けてあるベルが鳴った。

そちらに視線をやると、セーラー服を着た少女が立っていた。

「おかえり、菖蒲^{あやめ}」

「ただいまお母さん」

菖蒲はセーラー服のリボンを緩めながら常連客と一つ席を空けて座る。

「そうか、菖蒲ちゃんは今月は午前の部か」

「はい。午後の部は再来月です」

学校は壊されたり跡形も無くなっていたりで極端に少ない。

すべてを再建するには多額の金と時間を要する。しかし今は病院や電車に回したほうがいいということで学校は後回しにされている。

なので午前の部、午後の部と生徒を二つにわけて授業をしていた。必然的に授業時間が少なくなってしまっているので、三年制は四年制と一年増やされた。

再びベルが鳴り、今度は学生服を着た少年が入ってきた。

「こんにちは」

「いらっしやい龍くん」

^{みどりの}翠野龍。菖蒲とは家族ぐるみの付き合いだ。

迷わずに菖蒲の横に座ると、疲れたように息を吐いた。

「どしたの龍。なんか辛いことあった？」

「あった。抜き打ちテスト」

「だから毎日の予習復習はしようと言っているのに…」

「予習って何やるんだよ、予知能力でも備えてんのか」

「また屁理屈こねて。教科書借りて読むだけでもいいでしょ」

「うえー…そこまでやんのかよ…」

教科書の数が少ないことと、買えない生徒の為に貸出し制となって

いる。

「成績悪いと就職先決まらないと思うんだけどなあ」
常連客が口を挟む。

「そうそう。将来困っちゃうよ、龍」

「ま、菖蒲ちゃんはおくの嫁に就しょぶうっ！」

しょうぶが常連客の頭を掴んでカウンターに叩きつけた。
いつものことなので気にしない。

「はあ…蘭とは双子なのに、どうしてこつも違つんだろつな」

「やる気の違いじゃないかな。お母さん、紅茶飲みたい」

「あ、俺もお願いします」

「ちよつと待つてて」

湯を沸かし、ティーポットを温めてから茶葉を入れる。

ゆっくりと湯を注いで蒸らす。そこからカップに注いで一つにはミルクを追加した。

アールグレイの香りがふわりと広がる。

「はい菖蒲、龍くん」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。菖蒲はまだミルクを卒業できないのか」

「むっ、別にいいじゃん」

菖蒲は頬を膨らませてむくれた。

常連客は微笑ましくそれを見ていたが、

「ああ、そろそろ行かなくちゃ。じゃねしょうぶさんに二人とも」

「はい、また」

彼は代金を置いて出ていった。

ベルの余韻が断ち切れた頃、ミルクティから唇を離れた菖蒲が呟く。

「町復興委員会も大変だね。予算、なかなか降りないでしょ？」

「上が横領してるようだしね…どうして正直者にはお金がいかないのかしら」

ため息をつく。

この町に水道電気ガスがすっかり通っているのは八割方、彼ら復興委員会のお陰だ。

酷いところだとまだ水道が不完全な部分があるらしい。

「……………で、おばさん。今日は？」

他に誰もいないことを確認すると龍はしよつぶに視線を向ける。

「夜八時にここを出発。寝るなら今のうちよ、徹夜覚悟で行きなさい」

「うん」「はい」

「あとゆりちゃんも来るって。午後の部だから来るのは夕方ね」

「えっ、ゆり来るの？」

嬉しそうに菖蒲が笑う。

「じゃあご飯はゆりも一緒？」

「そうね。龍くんも食べていくでしょ？」

「はい、いただきます」

張り切っちゃうぞ、としようぶ。

和気あいあいとしたあまりに平凡な光景。

人を殺す職業の人間達だと誰が考えるだろうか。

ぬいぐるみ

遅めの昼食をとったあと、菖蒲は二階にある自室へと向かった。龍も後ろから付いていく。

「あ、今日は蘭くん来るの？」

「いや、と龍は首を振った。

「また風邪こじらせたから無理だ」

「え、大丈夫かな」

「多分。肺炎にならないように気をつけさせるけど」

奥から二番目の部屋を開ける。

ベッド、机、クローゼットなど、ごくありふれた家具が置かれている部屋。

ごくありふれていないのは大量のぬいぐるみがところ狭しと並んでいることか。

「……また増えたんだな、ぬいぐるみ」

「あれ、分かった？」

「配置変わるときは増やしたときじゃねえか」

配置が変わっていると気づいた辺り、いかに長い付き合いかということが出ている。

「ゲーセンで取ったの」

「ゲーセンつうと……あの戦前の機械使っているところ？最新のところ？」

「戦前のところ。最新は品揃え悪いの」

「さよか」

諦めたように椅子をひいて座る。

椅子には当然何も置いていないし、机には勉強道具以外乗っていない。

逆にいえばそこ以外はぬいぐるみが占領していることになる。

カーテンレールにも本棚の上にも余すこと無く。
ウサギ、ライオン、犬、猫、ウシ、ゾウなど種類は無差別。
何故そこまでぬいぐるみに執着するのかは幼なじみと言えど分らない。

スカートを脱ぎ、ワイシャツを脱いだ菖蒲がクローゼットに向かう。

「…いやまで。菖蒲」

「うん？」

「いつも言ってるんだろ。人前で服を脱ぐな！」

今はブラジャーとパンツのみ。

「医者とお母さんと龍とゆりとアイの前では脱いだことないよ！」

「俺は男だ！男相手に少しは恥じらいを持って恥じらいを！」

「今更何を言っているのやら」

やれやれと肩をすくめて見せる菖蒲。

10歳まで一緒にお風呂に入っていた二人にとっては確かに今更だつたりするが。

信用されているのか男として見られていないのか、なかなか迷うところではある。

「すぐ着るから。それでいいでしょ？」

「ああ」

くるりと龍に背を向け、流行り歌を口ずさみながらズボンを取り出す。

その白い背中には右肩甲骨のあたりから左脇腹まで、大きな傷跡がくつきりと浮き出していた。

刺し傷だ。

「……」

龍は無意識に唇を噛んだ。

それは自分が弱かった故に起こった結末の置き土産。
だからあまり、彼女の裸体は見たくなかった。

『あのこと』を思い出してしまうから。

「……龍？」

不思議そうな顔で菖蒲が彼の顔を覗き込む。

「私の顔になんかついてた？」

「あ、いや。なんでもない」

心配させないように笑った。

『あのこと』で一番気を病んでいるのは菖蒲なのだから。

菖蒲は納得いかぬという表情で何か色々考えていたが諦めがついたのかベッドの脇へ歩く。

「よっ」

床の小さな窪みに指を引っかけて上にあげる。

メキツという音と共に一平方メートルほどの床が持ち上がった。

その下には布がひかれ、銃器と弾丸が置かれている。

「点検しなきゃ。最近けっこう酷使してるから」

「詰まつたら困るもんな」

「うん」

二丁取り出す。

回転式拳銃、リボルバーと呼ばれるものと一発ずつ撃つタイプの自動式拳銃。

まず本体をバラバラに解体して、ほぼゴミはないが丁寧にふいていく。

その後、^{グリス}妨錆油をそれぞれに丁寧に塗る。

「ガタツキは？」

「ないかな」

組み立て直して、リボルバーには銃弾を六つ、自動式拳銃には弾倉を装填する。

それからポシエットとホルダーを引きずり出して、ホルダーに二丁を、ポシエットには予備の弾丸と弾倉を入れた。

ここまでの動作を短時間でスムーズにやってのけた。

「おしまい」

「おつかれさん」

布で手の隅々を拭く。

「ゆりも大変だよな。いちいちナイフを研いで、身体中に仕込まないといけないんだから」

「その分俺は楽だな。主な戦闘は殴るだし」

「でも訓練とかめちゃくちや厳しいじゃん。毎朝十キロマラソンに筋トレ」

「慣れたからどうってことねえよ」

ひらひらと手を降りつつなんでもないことのように言い切る龍。

テストの点数が悪いのは、何割程かはこれのせいもあるのかもしれない。

ただ。

点検も日頃のトレーニングも、手を抜いたら死ぬということは彼ら自身が良く知っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1922z/>

銃弾の先にあるものは

2011年12月10日00時58分発行